

社会科学のフィールドワーク教育：
考古学のフィールドワーク教育2016（フィールドワーク教育年次報告）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠原, 和大, 山岡, 拓也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010121

考古学のフィールドワーク教育 2016

人文社会科学部社会学科考古学研究室
篠原 和大・山岡 拓也

1. 考古学研究室とフィールドワーク教育

静岡大学人文社会科学部社会学科に属する静岡大学考古学研究室では、主に静岡県内を中心とした数々の遺跡の調査にあたり、その歴史的意義を社会に報告することで、地域に貢献してきた。また、その過程を通じて、多くの学生が知識や技術と経験を身につけ、そこから考古学や文化財保護・活用を担う専門家をはじめとして、広く社会に活躍する人材を輩出してきた。

2005年度の社会学科におけるフィールドワーク教育プロジェクトのスタート以来、考古学研究室では、「考古学フィールドワーク教育開発プロジェクト」を企画し、競争的経費の支援を受けながら調査、教育、研究を進める体制を確立してきている。2005年度から「静岡市佐渡山周辺の考古学」として開始した調査・研究は、同地区の手越向山遺跡の発掘調査を経て、『手越向山遺跡の研究－東海東部における弥生時代中期畠状遺構・方形周溝墓の調査』（2011年4月、六一書房、206頁）に結実した。また、2012年度は過去にも調査を行った静岡市神明山1号墳の確認調査を実施し、過去の調査と合わせて『神明山1号墳発掘調査報告書－第6・7次調査』（2012年3月54頁）を刊行した。このように、こうした考古学フィールドワークを通じた調査研究とその成果報告は、一定の水準で継続されてきており、2012年度からはそのほかの研究活動も含めた報告をまとめるようにしている（『静岡大学人文社会科学部考古学研究室調査研究集報2012』（2013年3月36頁）、『同2013』（2014年3月30頁）、『同2014』（2015年3月22頁）、『同2015』（2016年3月16頁））。この間、フィールドワークに携わった学生たちが中心となって、毎年、調査内容についての企画展示として『考古展』を大学祭に合わせて開催し、社会学科の学生研究発表会でも報告を行ってきた。こうした活動はまた大きな教育効果を生み出していると考えている。

今年度の考古学フィールドワークは、新潟県小千谷市真人原遺跡D地点第6次調査を実施した。この成果を以下に略述するが、詳細は『静岡大学人文社会科学部考古学研究室調査研究集報2016』（2017年3月刊行予定）にまとめる予定である。

2. 新潟県小千谷市真人原遺跡D地点第6次調査

新潟県小千谷市真人原遺跡は、A地点、B地点、C地点、D地点と4つの地点から構成され、主に後期旧石器時代後半期の遺物が出土している。A、B、Cの各地点では、1991年～2006年まで、新潟大学考古学研究室及び東京都立大学考古学研究室によって発掘調査が行われ、後期石器時代後半期の尖頭器石器群（およそ15,000年前）が残されていたことがわかっている。D地点では2007年に首都大学東京考古学研究室による試掘調査（第1次調査）が実施され、2010年、2012年に発掘調査（第2次・第3次調査）が実施された。その後、2014年からは静岡大学考古学研究室と明治大学黒耀石研究センターの共同調査を毎年実施している。2014年の第4次調査（発掘調査）と2015年に実施した第5次調査（発掘調査）の結果、D地点には、尖頭器石器群よりもさらに古い杉久保石器群が残されていることがわかっている。第5次調査までに石器57点、土器7点、炭化物2点が出土した。石器の多くは後期旧石器時代後半期の杉久保石器群に伴うものと考えられる。土器は縄文土器であり、出土した多くの石器資料とは異なる時代に残されたものである。こうした調査の経緯を踏まえて第6次調査を実施した。調査期間は2016年8月22日～9月3日の13日間であった。第6次調査も、静岡大学考古学研究室と明治大学黒耀石センターの共同調査であり、静岡大学の大学院生2名・学部学生8名も参加した。これまでの発掘調査で出土した遺物の分布状況に基づき、遺物集中（石器集中）があると予測される範囲の一部である12㎡を発掘した（図1）。その結果、石器7点、土器1点、礫5点が出土した。発掘調査の後には、後期の考古学実習Ⅲで、学部3年生が出土資料の整理作業を行い、石器の実測図を作成するとともに、トレース作業を行った（図2）。

3. まとめと今後の展望

例年、学科や学部の裁量経費の補助を受けて考古学フィールドワークとして実施している考古学的調査とその成果をまとめる作業を含めた取り組みは、その学術的成果によって受託研究や科研費など外部資金の獲得にもつながっている。また、学生諸君にとって、これらのプロジェクトを通じた経験は、これからの学問的展開のみならず、社会においてその能力を発揮していく過程においても多大な糧になっていると考えられる。今後も引き続き、フィールドワークとその成果をまとめていく経験を学生主体で行うことを中心とした教育プログラムを実践していく中で、考古学フィールドワーク教育の効果を高め、学生の将来に資するように工夫していく予定である。



写真1 真人原遺跡D地点第6次調査の様子(1)

写真2 真人原遺跡D地点第6次調査の様子(2)

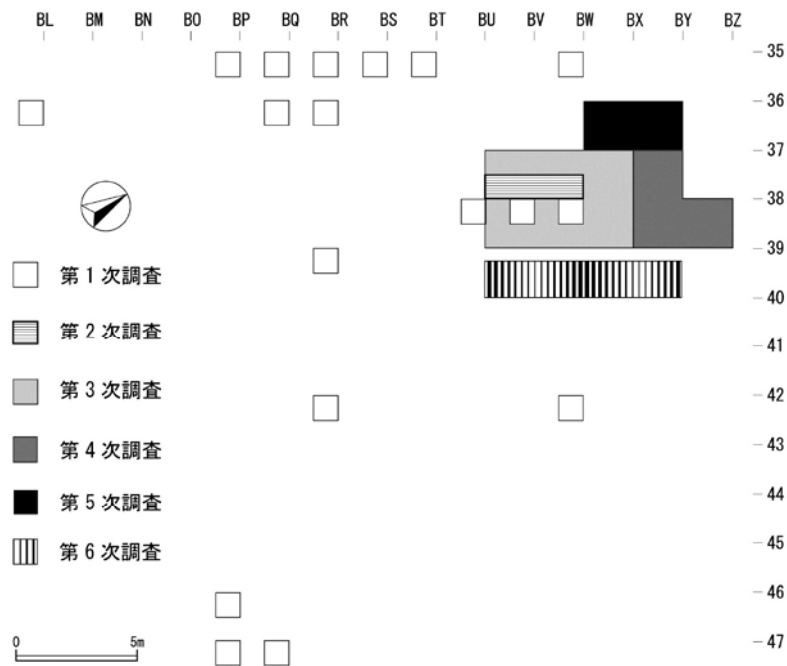


図1 真人原遺跡D地点の発掘区

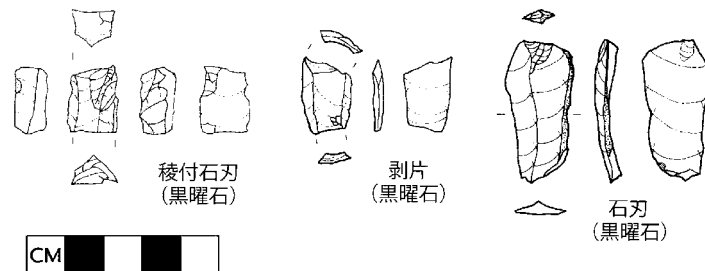


図2 真人原遺跡D地点第6次調査で出土した石器